

会議名	第11回全国草地畜産コンクール表彰・発表会
開催日時	平成19年6月28日(金)13:00-18:00
開催場所	発明会館ホール(東京都港区虎ノ門)
主催者	社団法人 日本草地畜産種子協会
参加人数(概数)	約145名(農水省・都道府県・試験研究期間・団体・民間・受賞者等)
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>標記の会議に出席した。コンクールの趣旨は「自給飼料の効率的な生産と利用技術並びに環境に調和した持続的生産・経営方式等優秀な事例を広く紹介し、飼料基盤の重要性の啓発、経営の安定に資する」ことにあり、会議はコンクールと発表会、シンポジウムからなっている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 開会挨拶(浅野会長)</li> <li>2. 祝辞(農水省畜産部長、代理)</li> <li>3. 審査結果の講評(萬田審査委員長)</li> <li>4. 受賞者の表彰(各受賞者の概要は別記)</li> <li>5. パネルディスカッション(萬田座長: 輸入飼料から地域資源を活用した持続型畜産の創出 - 草地畜産コンクール受賞者に学ぶ)</li> </ol> <p>以下に9点の各受賞者とその概要を記す</p> <p><b>農林水産大臣賞</b>  放牧部門放牧の部: 北海道八雲町 小栗 隆  (人・牛・大地の融合、ロマンを实らせた放牧酪農)  唯一の放牧部門のもの、高収益ではあるがコストがかかり、低収益の小栗氏  いうところの「介護酪農」(疾病が生じやすい)から、放牧酪農に転換し、  土と草と家族の力を生かした乳量7,000kgで収益は低くなったが、コ  ストがかからず、高所得を得ている事例である。糞尿は堆肥として還元し、  物質循環機能を生かしている。</p> <p><b>生産局長賞</b>  飼料生産部門永年牧草の部: 北海道小清水町 中山壽雄  (交換耕作とルーサン栽培で高品質自給飼料の生産)  フリーストール、ミルクパーラー、TMR体系による1万kg牛群による酪  農経営で、アルファルファとトウモロコシを組み合わせた長期輪作で高品質  自給飼料生産を行い、高泌乳を支えている。畑作農家との交換耕作で、草地  更新予定草地を畑作農家に貸し、畑作することで、ギシギシを除去し、それ  に見合う面積の畑を貸してもらってトウモロコシを作付けするところに特徴  がある。</p> <p>飼料生産部門永年牧草の部: 北海道別海町 片岡一也  (土づくりを重視した良質粗飼料生産で堅実経営をめざして)  草地全体の54%が9年以上の草地で、うち28%が13年以上の草地であ  る。徹底した土壌改良によって牧草の永續性を高め、良質な粗飼料生産を達  成し、土・草・家畜の循環を実践している農家として高く評価された。具  体的には熟成スラリー、堆肥の散布、窒素は控えてリン酸と貝化石を施用し、  マメ科牧草の維持に努めている。</p> <p>飼料生産部門飼料作物の部: 長野県立科町 立科町稲発酵粗飼料推進連絡  会議</p> <p style="text-align: right;">代表 角田敏明</p>

(良食味米産地の「コシヒカリ」で育った蓼科牛ブランドの確立をめざして)

稲作農家の飼料イネ生産組合と肉牛農家の利用組合に飼料イネの収穫・調製・運搬を行うヘルパー組合とからなり、特にこの地がコシヒカリ地帯であることから、その飼料イネを食べた牛ということでブランド化を目指している。そのため肥育後期にもこれを食べさせているのが特徴的である。

日本草地畜産種子協会会長賞

飼料生産部門永年牧草の部：北海道陸別町 藤澤和美

(草地管理に小麦栽培を取り入れた良質粗飼料の確保)

雇用労働力が5人の法人酪農経営で飼料作及び小麦作を経営内に持つ。経営面積は150haのうち90haは借地である。特にチモシーについては中生種を用い、標高の違いを考慮し、下から上に刈り取りを進め、出穂初めの品質良好な時期に刈り取り均質で良質な粗飼料を確保することに工夫が見られる。

飼料生産部門飼料作物の部：福島県南相馬市 相馬秀一

(たい肥がもたらす、土づくり・食づくり・人づくり)

桑園跡の遊休地を利用し、フリーストール、ミルクパーラー体系を導入し、低コスト自給飼料生産と高泌乳牛飼養を実現している。栽培はトウモロコシータリアンライグラスと永年牧草(オーチャードグラス)で、12.8haのうち10.5haが借地で、この狭隘な地で耕地を集積して酪農を成立させているところが高く評価された。なお、イノシシ害の対応が問題視された。

飼料生産部門飼料作物の部：島根県邑南町 沖田 浩

(自給飼料、自家育成で夢をかたちに)

狭隘な中山間地にあつて借地により飼料畑を確保し、育成牛、かん乳牛に自給飼料を与え、食い込みの良くなるように育て、絶対的な飼料不足の中で搾乳牛には購入飼料を与えるという発想で飼育をしている。そこに工夫があるわけだが、飼料基盤の拡大が課題としている。

日本草地畜産種子協会会長特別賞

飼料生産部門飼料作物の部：岡山県美作市 小林大悟

(放牧・飼料作付け・稲わら収集による粗飼料自給率向上への取組み)

自作地0.5haの中山間地で借地、遊休農地、稲わら、マメ殻などを活用した肉用牛繁殖経営(成雌牛36、育成9、子牛26)。人工授精師の資格を持ち、削蹄・除角の副業所得もあり、飼養技術も高く評価された。

飼料生産部門飼料作物の部：大分県佐伯市 相田 茂

(山あいの地で粗飼料自給率100%を目指す)

親子2世帯の肉用牛繁殖経営(成雌42、子牛32頭)、イタリアンライグラス、ソルゴーなどで繁殖牛の粗飼料自給率は100%、糞尿は堆肥にして全量水田、飼料作物に自作地、借地の別なく還元している。地域との連携を緊密に行っていることも評価された。

この後、短時間パネルディスカッションが行われた。次のような集約が行われた。

環境問題、飼料の高騰など危機的な状況にある。今こそこのような地域に根ざした安心安全な技術を展開し、牛の力、自然の力に依拠し、耕畜連携や地域の人たちに支えられた創意工夫ある技術を点から面へ拡大していく必要がある。

<p>2．今後の研究開発分野として重要と思われる課題・話題</p>	<p>狭隘な耕地で、遊休地の活用、借地などで土地集積を図り、創意工夫ある経営が紹介された。これらの事例をさらに集積して、技術、経営の両側面から解析し、必要な協力、連携、制度などについて総合的、体系的に研究する方向が考えられる</p>
<p>3．その他の発表課題で関心のあったもの</p>	
<p>4．今後研究開発課題選択に当たって参考にするべき事項等</p>	<p>2．3．参照（事例的に上げれば、物質循環に関わること、粗飼料の品質向上に関わること、遊休地の活用に関わること、害獣駆除に関することが発表の中から感じられた）</p>
<p>5．会議の所感</p>	<p>入賞者はそれぞれ困難を抱えながらもそれぞれがそれぞれの地域に応じた創意工夫をもって目標とする経営を実現しており、そこには経営者の確固とした理想と哲学がかいま見られた。その楽天性が聞くものに感動を与えている。購入飼料の高騰の問題があり、個々の経営がいかに飼料自給率を向上させるかいま極めて重要な時期にあり、これらの経営を点から面へ拡大して行くために技術、経営の面からさらに解析し、施策を含めた条件作りが必要である。</p> <p>なお、放牧部門の入賞が僅か1点であったことは淋しかった。</p>
<p>報告者</p>	<p>太田 顯</p>